

## 胎児の細胞利用の最先端医療と倫理問題

昨夜、NHKスペシャル「中絶胎児利用の衝撃」が放送されていた。

分裂能力が高い胎児の細胞組織をバイオ技術を使い、神経難病等への移植手術等での最先端医療の動きをアメリカ、中国、日本の現状を追ったものであった。

死産胎児、中絶胎児の神経細胞が、神経難病（ex. 脳梗塞、アルツハイマー、ALS、視神経難病、脊髄損傷等）の方々に福音をもたらすかもしれないという最先端医療の未来は、凄い、いいことかなと思ってしまう。

だが、中絶胎児の細胞組織を使うということは、放送でも触れていたが、一方で倫理問題を含む。

中絶の決まった母親に胎児の細胞組織利用の承諾を得るといふ。胎児は、母親の胎内でまだ生きている段階での話である。中絶した女性も、生命を絶ったという罪悪感が薄れ、我が子（中絶した胎児）が難病の方を救ったという想いで、中絶を肯定してしまうのでないかということも危惧される。また、中絶胎児細胞が医療に利用できるとなると、商売の対象品にもなりかねない。胎児の拒否権は保障されていないのである。

日本は、倫理の問題もありこの医療技術の応用は、審議中で、まだ承認されていないよう。

それだけに、胎児の細胞組織利用の先端医療の発展と倫理問題は、今後益々深刻な問題とあるであろうことは、容易に推測される。こうした世の中の動きの中で、私たちはどう「生命」に向き合えばいいのであろうか？

日同じくして、昨日の朝日新聞「生活」Pに、池田晶子の随筆「『生きる』とは奇跡の自覚に他ならない」を目にした。

その中に、命軽視の事件が多い世の中で「大変だ大変だと我々は生きている、しかし、その『生きている』とはどういうことか、そもそも我々は知っているのだろうか」と問い、「『生きる』の何であるかを知るためには、我々は考えなければならない。考える、すなわち内省する。」ことであり、「世の中のことは、どうなるの？ しかし、世の中を作っているのは、一人一人の人間以外のなにものでもない。一人一人が、自分が生きているという奇跡に自覚的に生きる、それ以外に確かな道などあるわけがないのである。」と述べている。

これからの最先端医療の発展と「生命」倫理の問題にどう向き合えばいいかは、私たち一人一人が、「生きている」、「生きる」を内省することでしか、その道は見つからないようである。

（2005年4月10日 記）